

益田市長
山本 浩章

令和2年6月、「中世日本の傑作益田を味わうー地方の時代に輝き再び」が日本遺産に認定されました。これまで営々として築きあげてきた歴史を活かしたまちづくりの成果であり、今後いつそうの推進と発信の契機となり得るものです。

ところで「中世」は歴史の時代区分のひとつです。西洋史では古代、中世、近代、現代の4つに区分されますが、中世はともすれば「暗黒時代」とされます。ギリシア・ローマの輝かしい文明が開花した古代と、人間中心の開放的なルネサンス文化が興隆した近代との狭間に埋没し、華やかな印象に欠けるのです。

対照的に、日本史における中世は自由闊達な時代です。その始まりについて、山川出版社の『詳説日本史』は実に端的に記述しています。「院政期には、私的な土地所有が展開して、

院や大寺社、武士が独自の権力を形成するなど、広く権力が分散していくことになり、社会を力で動かそうとする風潮が強まって、中世社会はここに始まった」。つまり、制度や慣習が形がい化し、中央による統制が緩み、実力こそがものをいうようになったのが中世だったのです。それは必然的に、地方に群雄が割拠する時代でもありました。

歴史をたどると、益田人がまさに才覚と胆力で乱世を生き抜いた軌跡が見えてきます。林野や鉱山から産出される材木や鉱物は、日本海を越えた国内外との交易によりさらなる富の根源となりました。中世を通じて当地の領主であり、一方では海洋領主的性格をも併せ持った益田氏は盤石の経済基盤を誇り、地形を活かした堅固な城館を構えつつ、強大な相手の傘下に入るときには巧みに最上の条件を引き出しました。そして、時代が下り、江戸末期には長州藩の永代家老として主家の危難に際し、一身を打ち捨てて重責を果たしたのです。

「令和」もまた、多少の意味合いの違いはあれ、地方の時代であり、何よりも実力が問われる時代です。先人の英知と決断を鑑とし、当市の発展を期したいものです。

日本遺産のまち益田の歩き方

第5回 市立雪舟の郷記念館所蔵の文化財

【問い合わせ先】

益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
担当：市文化財課 ☎ 31-0623

市立雪舟の郷記念館は、平成2（1990）年10月6日に、雪舟終焉の地とされる大喜庵の隣に開館しました。

当初は、雪舟の作品の複製を展示する予定でした。ちょうどこの頃、ふるさと創生事業（※1）が実施され、所蔵者の益田家のご厚意もあり、益田市は雪舟筆の益田兼堯像を購入しました。益田兼堯像は記念館を代表する作品として所蔵・展示されています。

この益田兼堯像は、代表作のほとんどが風景画である雪舟が描いた人物画として、その基準作となっていました。つまり、雪舟筆とされる人物画で、最も間違いない作品と考えられているのです。それは、作品自体の出来と、描かれた益田兼堯が雪舟を招いたとされる歴史的な背景によります。東光寺（大喜庵の前身）の住職竹心周鼎による文明11（1479）年の賛（描かれた人物を称える文）があります。また、館内では雪舟の足跡をパネル展示で学ぶことができます。

このほかにも、中世の益田を知るうえで重要な古文書を所蔵しています。安富家文書は、現在の安富町と美都町丸茂の領主であった安富氏（丸毛氏）の家文書で、鎌倉時代から室町時代にかけての古文書15点からなります。

周布家文書は、現在の浜田市周布町周辺の領主であった周布氏宛の文書5点で、いずれも陶晴賢の下剋上に益田藤兼が協力していたことを示すものです。

益田藤兼書状（3月20日／杵築別火氏宛）は、藤兼が杵築（出雲市大社町）に特権商人的存在を置いて、日本海交易の便を図っていたことがわかるものです。

場 乙吉町イ1149

石見交通バス浜田益田線、久城線、土田線など。雪舟記念館バス停徒歩7分。

※1 地域振興のために全国の自治体に1億円が交付された。各市町村が様々な取組を行なった。



雪舟筆「紙本著色益田兼堯像」
（重要文化財）